



# 大いちょう

平成28年 4月 28日  
さいたま市立高砂小学校

高砂小学校だより 平成28年度 No.2

048 (829) 2737

## 「子育てということ」

### ー 母の姿 ー

校長 石山 大介

連休明けの5月8日は「母の日」。例年、我が家では息子たちが母親に贈り物をしていますが、「母の日商戦」に乗せられたただのイベントにならないか。金額なんかじゃなく、「気持ちがかもってれば通じるぞ」などと余計な心配をしながら、私は、自分が小学校に入学して間もない日の出来事を思い出しました。

母は、怒鳴りもしなかった。ましてや、叩きもしなかった。ただ「返しに行きましょう。いっしょに行ってあげるから」と言って、私の手を引いた。

自宅の近くに、廃品回収業を営む家があった。通学路に面したその家の前には、いつも回収した廃品が積み上げられていた。小学生の私にとって、それは宝の山だった。多少は壊れたり汚れたりしてはいたものの、自分の家では買ってもらったことのない「おもちゃ」がたくさん捨てられてあったからだ。小学校に入学して一週間も経たないある日のこと。私は、お目あての「おもちゃ」がまだ宝の山の中にあるのを確かめた。

私は、学校の帰り道、友達と別れて一人になったことを確認して、廃品回収の宝の山から、お目当てのおもちゃを一つ取り出した。そして家に持ち帰り、親に分からないようなところに隠し、見つからないようにして遊んでいた。2、3日後、母が、買い与えた覚えのない「おもちゃ」でこそこそと遊んでいる私を見つけ、「どうしたんだい。そのおもちゃ」と私に静かに尋ねた。私はごまかす術もなくただ黙っていた。ものすごく長いような短いような沈黙の末に、「それは、あなたのものではありません」と一言。

恐る恐る母の顔を見上げるとまた微笑んでいた。「返しに行きましょう。いっしょに行ってあげるから」と言って私の手を優しく握って、廃品回収をされているその家に向かった。

母は「申し訳ありません。この子を許して下さい」と私の手を握りながら深々と頭を下げた。業者が母に何か言っていたが、はっきりとした記憶はない。帰り道、母は私の手を離し、私の先をゆっくり歩いて家に向かった。手を離されたことが、私の心に矢のように突き刺さってきた。私の手を離したことにどんな意図があったのか、無かったのかは分からない。子どもごころに「捨てられる」と思ったのは確かだ。涙が溢れてきた。母の後ろをとぼとぼと歩き、家に着くと母は「遊んでいらっやい」と静かに言った。私は何も言えずに言われるがままに家を出て、いつも友達がいる場所に向かったが、遊ぶ気持ちになどなれずすぐに引き返した。玄関を開け、母の姿を探すと、仏壇に向かって正座をした母の背中が仏間に見えた。背中が震えていた。前掛けをたくし上げて涙を拭っていた。

あれから50年以上もの間に幾度か、あの日の出来事が映画の一場面のように浮かび上がり、同時に「ごめんなさい」が噴き出し、「ありがとう」が湧き出てきます。

自分自身、歳を重ねるにつれ、あの時代に生きた母の苦労やその時の母の気持ちが、少しだけ分かるようになってきました。ほんの少しだけですが、今はその時の「ごめんなさい」とは、ずいぶんと違う「ごめんなさい」になっていることも確かです。

また、教育という仕事に携わり、自分にも子どもができて、子育ての難しさを知るようになってから、あの日の出来事を話題にして、どうして私を叱らなかったのか母に直接確かめたいと何度も思いましたが、それはついに叶うことはありませんでした。

芽吹いた若葉は陽光を浴びて色を濃くし日に日に逞しくなっています。校庭の鯉のぼりは、5月の爽やかな風に悠々と泳いでいます。これらはあたかも高砂小のみなさんのようです。

希望に夢に向かって伸びよ、登れ。